

特42

909

假名垣魯文著
守川周重画

中





高橋阿傳夜叉殿初編中之巻

假名垣魯文補綴

○第三回

臥猪の床よ青嵐賦を覺す

産神祭祀の神樂の昔の遠く利根川の水よ響き田舎芝居の鳴物の近く後閑村の林よ傳ふ三更の月高く昇り四阿の庭隈なく照らして隠すとすれど願てる、忍び出立よお角が家の脊戸を窺ふ壯者の足元高橋勘左衛門にて拔足さし脚耳映だつて家をよ夫ともまら髪のお老婆廻る因果の糸操車ブーン／＼茶鳴く蚊を拂ひ夜延の燈臺元くらく勘左衛門が腰よ佩たる刀の銘り扉よ礎るを響の疾耳速くも聞付疵持足を踏立て誰哉と春戸よをり立て戸を引おくれればよかたる勘左衛門の突然入りお角此家におこるの居ぬり響よ足下と連立て祭禮へ参詣した儘で夜が更るに歸らぬから大方故家へ寄つたであらうと今櫛淵と訪ねたが此方へい來ぬとの事必定同伴の足下の處へ寄つたであらうと星を點れて愕くりすれど素より悪婆が早速の舌頭ハネ響の口連立て参詣したなれど猪孤屋の山り角で別れて妻の歸りました偶さかの脚序向處へかお寄で有まえ



やうと空嘯くと聞もぬへず疑は、アの理汗一盃喰とせてうまくと歸さうとて歸ら
うか主ある女と引込んで密夫の煤灼の欲の眼の黒暗より子細ぐあらうと踏込ひ一間に
おはるの愕り清吉に蒲團被せて胸をすへ其身の方より進み出モシ旦那さん堪忍して
是に譯のある事といふを案内の手探りよおとるが髪に毛引搦み右手の掌の雨ゆら
れ障に聞いた姦夫の清吉め何處にゐる重ねて置いて両断する太い老婆情い
淫婦勘左衛門が此面へよく肥後となすりをツた片つ端うら発さぬぞと障子を踏折
遣鉢ひつくりかへす灰泥れお角の其儘裏口より逃去る跡におとるの叫び蒲團被りて
片隅に潜まり居たる清吉のおとるが苦痛を看兼てや飛んで火に入る悪漢の性根をす
へて蒲團と刎退け勘左衛門が打手を押へ女と手込よ大人氣なく本夫の威光の威打擲
合手よするなら此清吉と如何でもして看る此上の逃も隠れも貧乏動きもまねへどと
力ら委せよ突放せば勘左衛門の刀の鯉口扱とばめて聲ふるはし情こそ清吉姦夫の罪
の通れぬ此場の不体裁重なり合とも尋常に首延すとも勘左衛門諸共覺悟をえると詰寄る

を清吉のどつろと坐しヤ勘左衛門姦夫とい何の處言何處も密夫の証據がある追せ
と譯を聞いた上自然此方々非に陥たら速くれ速かれ無いからた命いつでも與でや
る斯なるからいふちまけて最初の事からいふて聞かそう他聞悪い姦夫呼はり密夫沙
汰なら其方々まをとこ足下の女房よならぬ前自己とお春の夫婦の約束飽もあかれも
せぬ中と養ひ親の壓制で足下の女房よ成つたのうら世の義理とい言ひながら親の
許さぬ中といへ先口かけた清吉よ一言半句の沙汰もなく嫁へ行とい女も女いつか
何處でう出會たら思ふ有丈怨みをいとふと待よ祭りの歸り道折よく出わふた反甫み
ち否と云のよ無理往生運て此家よ脚やすめ一間を借て示談の最中理不盡のまをとこ
呼とり白痴威しの刃物三昧その強迫と怖く思ひぬ信濃産れの喰詰者堅氣に情婦と
取られちやア故郷へ耻をさらしなの田毎の月の顔汚し姥捨山の身ハ捨鉢淺間の煙と
ハ消させぬ諏訪の氷のあふない橋と渡りかけたる係り合上州者よ活馬の眼をぬれた
此始末斯なるからい退引ならせおとるをくれるか但し又金と轉んでおはるが斷縁耳

と柳へて二百兩女と引替此場で渡すか如何でも密夫と看認たなら見事ふたりを重
ねて斬るう二ツに二ツの返事をしやれと尻引まくりて揚わぐら素よりおとるの色香
に溺れとなれもやらぬ勘左衛門今清吉が舌頭言ひまくりられて打感ひ初めの氣勢
をこへやら瀾りし方の柄も緩み猶豫時しもお角舌おはるの養父小左衛門引添
ひて實母のおきのも此家よ走付子細と聞くも清吉がいひ懸りの全く一時の罪を通る
作へ言に疑ひなけれと姦夫といふたしかなる証據もなければ理と以て非は陥り
勘左衛門の湖身つけ込む悪漢根生密夫の汚名と雪がすば冤の罪の濫衣と着せた
始末を役所に訴へ互ひに隠すくらやみの恥いたちまち表むさその口止おはるとく
れるり女に換る二百兩身と聲の膝とも談合願て夜明も問もあるめ疾々掃をわけぬ
かと促し立るを小左衛門思案の臍をうち固め清吉を別間に招きゆすりと知れぬ此事
を世間に洩らさば一家の恥辱養ひむすめの不行跡も付てい聲の外聞を近郷までも觸
布く道里と清吉を品よく論し閨女の儘よて走來たれば今い所持する金子もなげと五

十兩よて勘辨なさは明朝我家で証書と引替相違なく手渡すべしもし不承知なら養
女のふしまつ足下と子細のあることも老の眼で看認て置いたとてもの恥のかき序親
の手づから召連訴へ養女も足下も淨玻璃の鏡にうけて黒白を別々の官の御沙汰にあ
るとさそぐの老煉肝に針刺れて戦々底氣味わるく安い物だが手を拍決着金受とるの
翌の朝當村内のあたまで役澁谷の家名よ統の付くこの粉ねの高橋の家にも響く世間の
喋々外へ洩らさぬ口止を五十兩とい價でいねへそんなら目那また明朝わしのお先へ
引取ますと肩に掛たる手拭ひに頬冠りしてのそくと脊戸の方より立去けり跡打み
やりて小左衛門のおきのと俱勘左衛門おとる夫婦を伴なひ連一先櫛淵の家よ歸り
おきのおとるを罵罵し小左衛門の勘左衛門の意のうちをうら問勘さるもんどの
へるやう妻のおとるが淫行の吾輩方へ嫁らぬ以前渠過つて改むる竹筒わらばその罪
の舊ら問とせ妻として眞のこゝろと安めんと妻よ感觸る心より離れ難なき風情わ
れば然らんとい今宵の始末に此儘よして洩らすまじ壁よ耳ある世の習ひ夜更たれと



勤左工門浴
室よ妻の腰
妊と怪む

ふたり共我家に泊るの近隣の不審を招く基となれば夜明ぬらちも歸るが宜しおきの
どのの泊れぬ路次も土地の悪風例の破路戸も出わるとい難儀と睡りにつかたる
四五人の作男を呼び喚一前後は挑灯照らさせて翌とひせめを其夜のうちに後閑村へ
送りやりぬ斯てその翌る朝清吉の櫛淵の家より來り小左衛門に面會して昨夜約束の金
を乞ふにぞ証書と引替五十圓を清吉に渡しやると思ひ儲けぬ大金の博奕の資本を得
たりやと悦び勇て彼處なる衰彦道場へ走せ至り浮べる富の一夜も有たず皆うち敗て
元の空阿彌財布の空となりしとぞ

そもこの鬼神の清吉の信濃國伊奈郡朝日村の農民有賀清助の次男に生れをさなき
頃より博奕と好み農業を怠らざらひ父母の目とくらま一窺かに金銭を掻さらひ市場
に出て賭徒の端にすたるも度々に博徒の群にも面貌を看知られ其頃朝日村の
眼張小僧と呼ばれしその眼の人並よりも多きとて且いするを故といふ年十
五のより他人の者を掠めし事の露顯して父清助の物堅さ性質なれば忍ち家と放逐

せしより竟に博徒の群に入り熊尻の熊藏とてその頃名高き衰彦道家の子分となり
て彼處や此所と暴行あるさよからぬ事の數と盡し殘忍無頼に世渡るうち時文政
二年の冬同國佐久郡岩村田に住吉の神事ありて夜一倍の群衆を看當に就く賭博
の楚市街に敷て勝負を争ひに此夜清吉の諏訪の方より懐ろ寂しく廻り來たりいづ
れの楚の貸元にも路金を乞ひて先一端熊尻の熊藏方へ立戻らんと群居る人を押分
て賭徒の舉動を看やるに此貸元の伊奈郡は天魔の大九郎と呼ばれたる此道の巨魁株
よて豫て熊尻の熊藏といかすり場の争ひより日頃の中睦ましからき此は随ふ手
分の者も互ひ牛角のあらそひ絶え今とからきも清吉の此場は來合せ大九郎の
居るを看かけて退かば億病者と嘲られん親の遺恨の子のうらみ若間違と腕づく
と草鞋の儘よその場へ踏込み天魔の親分久しぶりだ盛った所ろで無心があると敷
から傍若無人のことばを何奴ならんと大九郎の眉よ皺よせ看仰げつ、誰かと思へ
ば眼張小僧が今が勝負の興ッ盛り無心があるとそこら並んだ店屋物の差込の



田樂除藤漣の執事が一盃飲たく成つたのか意地の積れへ下卑野郎飲代の無心なら
一切形が付いた跡うしろから廻つて來い客の手前も憚からず氣の利うぬ小僧め
と白眼付ると胸ともせせオイ親分ひよつ子ながら搦尻の熊藏が子分の清吉羨込の
おでんやどびろくいのおめへの子分の口より合かおらの畑の上種もる胡瓜のへばく
た南瓜野郎の藥種もしたくもひとりもねへおらぐ無心此場錢殘らせ借てもきて
へのだと暗嘩じかけの此場の抵抗大九郎のこれを聞より面色朱を注ぎ左右目く
ばせする間もあらせず長脇差も切緒のわらじ身と固めたる子分の四五人一度も清
吉に立か、り青年と侮りめつた打むねんとあせれど多勢も獨り敵しかねて人込の
中と潜りつ此場を避け一先明神の森まで來り茲まで亂れし聖くさわけ衣服の泥を
摺落し草鞋のひもを結びえめ長わさざしの鯉口くつろげ御手洗の水も咽喉を潤は
し徐々町に立出て賭場のやうすを窺ふよはや更闖て人もちり市商人の荷をままひ
博徒のじじろを捲とりなれば清吉の時分の一しと海野が住家よ立歸る大九郎の途

中を待伏ららみをとらすの金井が原と小高き丘の嶺の陰に潜ひともいささろ妙の
霜の夜道の枯草と踏つ、來う、るふたりの者のはなん天魔の大九郎關路をてらす
小田原挑灯先よ立たる子分よ提させざるしの大字の紛ふ方なき跡と見るより清吉
の丘より下りて行先よてうちんばつさり子分の肩先ばらりすと切倒す大九郎の
事の茲よ不意よ出れば驚きあわて二足三あし身と退り何奴なれば此親箱海野の天
魔と看違へて追刺つものり出来星どろばう合手が進ふ出なはせと言せもあへせ聲
ふりたてそのらうせさの目張の清吉さいせんり多勢をたのみよくもひとり手込
あしたな頃日重なる遺恨の返報こよひの仕うへし覺悟をしる「何をこしやくなび
んころ小僧め飛んで火よ入る夏の虫刀の錆よしてくれんと二尺八寸だんびら物す
らりと引ぬき唯ひとりうちと被りかくるを清吉の疾よりたくとふ砂の目つぶし大九
郎の眞向めかけつしと投れば捨りし紙の包いどけて飛ちる砂の目口よ入りて働
くれき身法のわつばがふるまひと天魔の阿修羅のあれ身となり如泡開夜のめつた

打清吉の右よさけ左りよ受て大九郎のうしろへ廻り肩さきより乳の下りけて切さ
 ぐる零のさへよ何りのたまたま唯一刀よ息たへたるを乗か、りて止命とさし傍へ
 ようごめく重傷の子分も息の音とめて大九郎が腕巻よ包みて所持せし三百兩の金
 ひき渡ひてその場を立退あしをとかかりよ熊尻の熊藏方へ走かへりて云々の始末を
 語るよ悪事を好むる熊藏の清吉が此とたらしを歡ひ稱して信濃の天魔と自から誇
 る悪徒を殺せし手續の程は實は鬼神の化身なりとて是より鬼神の清吉と同類中よ
 て尊敬せられ忽ち男を賣しかど大九郎が子分等々仇と狙ふて付まとへば熊藏の渠
 が爲よ秘藏の子分を打たれもせば一世の恥辱と國越させ上州邊へ路しやりしに嘉
 永二年の春よして此時清吉の二十四年と聞えたり
 記者此清吉が來歴の現よ長野縣下在松本の知己何某が來社の一話よして傳外
 の餘談なりと雖も本文これよ係るの話し多きと以て附て此者の小傳と略記せり
 看客應報の至きハ大編を讀みて知らせたまへ

官 朝鮮
 大包代二十五匁
 許 牛 肉 丸
 中包代十匁五厘
 小包代六匁五厘
 名法

官 たんせきさの茶
 許 天 泰 丸
 一包代六匁五厘

け美の男女をくぐりびにありひい
 分二ひおととのふりまをさあり
 考、持美よは利ひ成りり、持と
 ほとやうあ、よんまよまのふりひ
 あれ、虚弱の人とて、空病は佳あじ
 む要、あの本然、あうは求、ふん、成ひ
 此天泰丸、あ、分一たんせた。せん
 そく、らうま、う。あ、く、は、う、ん
 〇、う、かん、〇、き、う、う、う、〇、さん、せん
 さん、ご、の、せ、た、〇、小、兜、百、月、せ、た、を、地
 一切のせた、利ひ、功、効、速、う、あり
 要、く、ふ、本、然、出、よ、死、い

出板御届明治十二年二月三日
 京橋區出雲町四番地
 編輯人 假名垣魯日文
 日本橋區横山町三丁目二番地
 出板人 辻岡文助
 錦繪問屋 金松堂

